

# 宮沢賢治論

——その晩年の行動についての疑問——

萬 田 務

1

宮沢賢治文学は、一口に言つてその多様性と独自性との二点に  
しぼられるが、これらの二点が、彼の文学を享受するものにとつ  
てさまざまな評価をうむことになる。たとえば、谷川徹三氏と中  
村稔氏の「雨ニモマケズ」論争（昭和三十八年二月十五日付・「朝日  
新聞」参照）、この中村氏と同じとらえ方（つまり、「羅須地人協会」の  
農民運動に賢治の生涯の頂点を求め、それを社会経済史的観点から意義づ  
けようとする）をしているのは、国分一太郎氏、この二者とまつた  
く反対のとらえ方をしているのは、谷川氏をはじめとして古谷綱  
武氏、伊藤信吉氏等である。一方、小田切進氏は、賢治の文学を  
アヴァン・ギャルドの文学としてとらえるのである。<sup>註2</sup>これら、と  
らえ方の相違は、それぞれのビジョンの相違であり、ただ共通し  
ているのは、いずれも賢治の晩年、または晩年の作品に触れてい  
るのであるが（ここでいう晩年とは、彼が農学校の教師を依願退職し、  
自作農をはじめた年、すなわち大正十五年・昭和元年以後を指す）、たし

宮沢賢治論

かに晩年は、その行動にも考え方にも文学にもさまざまな要素を  
含んでいる。彼には緻密な性格がある反面、本能的に行動すると  
いった具合に正反対の性格があり、それがいろいろな面に現われ、  
彼の人間をとらえるのにいつそう複雑さを増すのである。

この稿では、晩年における彼の行動についての疑問を私なりに  
一瞥してみたいと思う。

2

大正十五年（昭和元年）には、同十年十二月から四年四ヶ月勤務  
していた花巻農学校を依願退職し、花巻郊外の下根子に寓居を構  
え、付近の荒地を開墾し、農民としての生活のスタートをきるが、  
その依願退職の理由として、いくら教壇から生徒に向つて、百姓  
になるようにとすすめても、その自分が実際に農業に従事してい  
ないのではないかと反省したところによるものである、とはよく  
言われているところである。しかし、その行動はどこか生得なもの  
の意味している。賢治は生来、愛他的ではあるが、胸中に去来

二七

する理想を深く追求するとき、あたりかまわずつっぱしらざるを得ないのである。たとえば、中学校時代の山登り、大正十年の旅費のみで家出同様の上京のように、また、月給をそのまま他人にくれてやったりしたように。

また、一般には賢治が、農民になることを宿願としていたかのように受けとられているが、彼は決してはじめから農民になりたいたいという希望をもっていたわけではない、というのは、「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」においては絶対的権力への憧憬を示し、また、これより二年前の大正七年（盛岡高等農林学校研究科在学中）、父・政治郎氏宛の書簡には「研究科に残り候とも土性の調査のみにては将来実業に入る為には殆ど仕方なく農場開墾ならば兎に角差当り化学工業方面に向ふには全く別方面の事に有之候」とあり、自分が志す化学工業方面には、土性調査など役立たぬことを述べ、また他の書簡（大7・6・20）には「加ふるに今年四月以来私の早く自分の仕事に従事し度き為か何分急ぎ候様の事のみ多く分析等も充分心に入らず甚しき失敗を致す事多く御座候」と述べていることによっても、賢治がはじめから農民になるうという意志をもっていなかったことは明らかである。

大正十四年元旦の「異途の出発」において、これからの自己の行く手の苦難を象徴的に述べ、十月の「告別」には、「おれは四月はもう学校にゐないのだ、恐らく暗いけはしいみちをあぐるくだらう」と述べているかとおもうと、同年の十二月二十三日、森佐一氏に宛てた書簡では、「ご親切はまことに辱けないのですがいま

ほかのことで頭がいっぱいですからどうかしばらくゆるして下さいませんか。学校をやめて一月から東京へ出る筈だったので、延びました。夏には村に居ますから、それから夏には謄写版で次のスケッチを拵へますから（下略）（傍点・萬田）と書いているのである。だから「異途の出発」において、自己の行く手の苦難を象徴的に語ったことも、また「告別」のなかでいう「暗いけはしいみち」にしても、果して農民としての苦しみであったのか、それとも、以前（大正十年）に上京し、苦い経験をしたあの生活の予想であったのか判断がでかかねるのである。

そして、依願退職の理由も、同年の十二月一日、弟清六氏宛の書簡で、

お手紙見ました。すぐご返事するのですがこの頃島山校長が転任して新しい校長が来たりわたしも義理でやめなければならなくなったりいろいろごたごたがあったものですからつい遅くなったのです。（傍点・萬田）

と書くのである。さらに、大正十五年四月五日の森佐一氏宛の書簡では

学校をやめて今日で四日、木を伐ったり木を植えたり、病院の花壇をつくったりしてゐました。もう厭でもなんでも村で働かなければならなくなりました。東京へその前ちよと出たいのですがどうなりますか。（傍点・萬田）

と書いていることは、それまではまったく農民になる意志をもっていなかったことをものと同時に、ここでも、上京への愛

着を捨てきれないのである。「厭でもなんでも村で働かなければならない」から、また、これといてする仕事がないために、家の所有地である下根子の荒地を開墾したと云っては、いいすぎであらうか。だからこそ、「農民芸術概論」において、「おれたちは農民である」云々を述べ、自己宣言、ないしは自己確立を明示せざるを得なかったのである。もちろん、この裏面に幼時から宮沢家という宗教的な雰囲気の中に入った家庭環境から自然とつちかわれてきた、宗教的ヒューマニズムもあったことはいうまでもない。理由はともかくとして、これより何日か後に、農耕生活に入っていたことはまちがいない事実であり、そしてその決意を

陽が照って鳥が鳴き

あちこちの櫓の林も

けむるとき

ぎちぎちと鳴る汚い掌を

おれはこれからもつことになる

〔春〕

と語り、実践活動に入っていく。

野ばらの藪を

やうやくとってしまったときは

日がかうかうと照ってゐて

それはがらんと暗かった

おれも太市も忠作も

そのまま笹に陥ち込んで

ぐうぐうぐうぐうぬむりたかった

川が一秒九噸の針を流してゐて

鷺がたくさん東へ飛んだ

〔開墾〕

ここでは、実践活動の労苦を述べているが、初期においてあれほどほどまでに明るかった賢治の作品<sup>註3</sup>——自然の風物や季節の推移などと結びついてひらけた心象風景は、この期になると、自然の苛酷な条件下におかれた生活感情のよどみが作品の中に定着していこうとする傾向が、すでにここに看取されるのである。彼の農民としての日常生活は、非常に荒れずさんでいたことは多くの伝記研究家が伝えるところである。いくら疲れていても、他の農民が仕事をやめるまでは、彼もやめなかったと言われているし、食事なども夏などは三日分位を一度にたいておき、それを腐らないように井戸につるして、水とたくわんですましていたことも教え子の語るところである。賢治のこのような辛苦な農耕生活の回想を菊池信一氏は次のように語る。<sup>註4</sup>

陽やけた顔とあみ衣を透してあらわにみえる黒い肩、蚊に刺されて無数の黒点いっぱいな腕、破れたかがとの穴を反対に上にして穿いている靴下のその穴からみえるのは、多分鏝でもあろう大きな切傷に沃丁が塗られ、私は思わず驚かざるを得なかった。

——最初の日はやっと二坪ばかり、この次の日も二坪とちよつとばかり、何せ竹藪でね、夕方には腕がジンジン痛む、然し

今では十坪位は楽ですよ、体もなれて、もうなんともない——  
 それでも先生は真剣にうれしそうに開墾の模様など語られ乍ら、汲みたての冷たい水を茶碗に注いでくれた。  
 これなどは、賢治が如何に農民としての生活に没頭していたかという、よい例である。

おれたちはみな農民であるずるぶん忙がしく仕事もつらい  
 もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

〔農民芸術概論〕序論

と一般の農民に呼びかけ、そして「豊かな稔りを願へるままに／二千の施肥の設計を終へ」〔野の師父〕、また、豪雨にあった時には「わたしはたうとう気狂ひのやうに／あの雨のなかへ飛び出し／測候所へも電話をかけ／村から村をたづねてあるき／声さへ潤れて／凄まじい稲光りのなかを／夜更けて家に帰って来た／けれどもさうして遂に睡らなかつた」〔野の師父〕くらいに奔走するのである。

しかし、彼のこういう必死の努力にもかかわらず、天候は「過ぎ来し五月二旬の間／淫らなおまへエフヘテ雲族は／西の河谷を覆って去ら」ぬといった状態が続き、「そらを仰いで烏潜せしことや／日々にはなはだ数度であつた」〔県技師の雲に対するステートメント〕。彼の作品には天候、特に豪雨に素材したものが多くうたわれ、そこには絶望が強くにじみでているが、その天候に対して全く受動的であつたわけではない。ここに彼が学生時代に修得した農学が登場し、農業技術や肥料設計など、自然科学における彼の

持ちうるだけの知識が駆使される。「和風は河谷いっばいに吹く」(昭2・7・14)は、その現われのよい例である。しかし、いくら科学的知識を駆使しても、自然の前にはその力も及ぶことができず、やがてその活動も挫折せねばならなかつたが、挫折したところで彼の胸中を去来してやまないものは、やはり農民のことであり、そして稲作のことであつた。

西曆一千九百三十一年の秋

このすさまじき風景を

恐らく私は忘れることはできないであらう

……………

けれどもこれら緑のいろが

青いまんまで立ってゐる

その粟は家畜もよろこんで喰べるではあらうが

人の飢ゑをみたすとは思はれぬ

その年の憂愁を感じるのである

〔小作調停官〕

この詩にある一九三一年(昭和六年)は、昭和三年来の彼の病気が一時快癒して、四月から東北砕石工場の技師となつた年であるが、農村への関心は相変わらず強かつたことをものがたつてゐる。さらに、昭和八年の臨終の前日(九月二十日)には、「急性肺炎の徴見」えたにもかかわらず、「同夜遅くまで一農夫の肥料設計の相談に應對」しているのであり、これらのことは賢治が如何に農民のことを憂慮していたかが窺えるのである。

このように賢治は寢食を忘れ、自己の健康をも顧ずに農耕生活に没頭したといつても、決して過言ではないし、自己の肉体的ないし精神的な労苦を素材とした作品が多いのは当然としても、彼が仲間として考えていた農民たちからの中傷を素材とした作品があるのはどういふことか。人間である限り完璧でありえないのだから、中傷されたとしても不思議なことではないが、その中傷は、ただ単なる中傷なのか、それとも賢治の側にその原因があるのか。いまそれを探ってみても決してむだなことではないと思う。何故ならば、賢治側にその原因があるとすれば、賢治という人間がいつそう浮き彫りにされると思うからである。

結論を先にいうならば、その原因は賢治側にあるといえるだろう。

「グスコイ・ブドリの伝記」の「八 秋」のところでは、稲作の不良を彼の施肥指導の結果と誤解されて村民たちに迫害された描写があるが、現実においても、たとえこのような強度なものでなかったにしても、精神的な迫害を受けたことは、他の作品によつても窺うことができる。

「もすこしからだも強靱くつて／何でもやるかとおもつてゐたが／なあにおまへが百姓なんて／とてもやり切れるもんでない／だまって町で月給をとつてゐればいいんだ／さういふからだで無理をしたつて／誰のためにもなるもんでない」（その父と会ふ）と

いうのは、まだ好意に満ちているほうで、彼をもつと苦しめるのは、「倒れかかった稲の間で／ある眼は白く忿つていたし／ある眼はさびしく正視を避けていた」（倒れかかった稲の間で）というのや、「作品第一〇四二番」にあるような、不断、仲のよかつた「程吉」が、「横目で」、または「奇怪」な眼つきで彼を眺めるのである。しかし、このような多くの「程吉」の眼を挑発した原因は何であつたのか彼にはわからなかつた。自分の「レアカー」のなかの／青い雪菜が原因ならば、また「切りとつてきた六本の／ヒアシンスの穂が原因ならば」、「それは一種の嫉視である」から、「明日は消える」だろうが、「漠然とした反感ならば／容易にこれは抜き得ない」というのである。こういう体験を経て書かれた「ポラーノの広場」<sup>註5</sup>には、その対人関係のむずかしさを知つた彼は次のように言わざるを得ない。つまり、賢治の分身のレオーノ・キューストは、これもやはり彼の分身のファセーロとその仲間たちから、その仲間にはいつてくれとたのまれたときの言である。

「いや、わたくしはまだまだ勉強しなければならぬ。この野原へ来てしまつては、わたくしにはそれはいいことでない。いや、わたくしははいらぬよ。はいれぬよ。なぜなら、もうわたくしは何もかもできるといふ風にはなつてゐないんだ。わたくしはびんぼうな教師の子どもにうまれて、ずうつと本ばかり読んで育つてきたのだ。諸君のやうに、雨にうたれ風に吹かれて育つてきてゐない。ぼくは、考へはまつたきみらの考へだけれども、からだはさうはいかないんだ。」

ここでは、自分は積極的に協力、あるいは援助することはいささかも惜しまないけれども、自分の「からだはさうはいかないんだ」と健康の問題を理由として、あくまでも自己の限界を守ろうとするのである。事実、賢治の健康は、農民として生活していくには耐えられなかったが、果してそれだけの理由でファゼーロたちのなかへはいっていくことを拒むであろうか。しかも、「考へはまつたくみらの考へだ」と言い、「ずうっと前からぼくは野原の富を、いま三倍もできるやうに考へてゐた」し、これからもそのことを考えると言うのである。「羅須地人協会」設立時の賢治であれば、自己の健康のことなど「カンジ ヲウニ入レ」なかつたであろう、というのは、「いそがしい田植どき／病氣ではたけなかつたことは／村ではそのまま罪」(「まぶしくやつれ」)なのであるとも考えていたし、さらに森莊巳池氏の伝えるところによれば、ある日、母が野良仕事をしている彼に対して、もうやめなさい、他の人は家に帰ると夕餉の仕度ができているが、あなたは帰ってその仕度をしなければならぬのだからと言ったところが、彼は、他の人が一人でも仕事を続けている限り、自分は仕事をやめるわけにはいかなないと述べたそうである。これらのことから推してみても、健康の理由だけで、その仲間に入れないと断わることがないと考えられる。やはりそこには対人関係の煩わしさが、多分に影響しているのではなからうか。この対人関係の煩わしさは、やがて、

くらしが少しぐらゐらくになるとか

そこらが少しぐらゐきれいになるとかよりは  
誰ももう手も足も出ずいまのまんまで

おれよりきたなく

おれよりもくるしいのなら

そっちの方がずっといいと

何べんそれを聞いたらう

(みんなおなじにきたなくでない)

みんなおなじにくるしくでない)

そうしてそれもほんたうだ

(大祭)

という倦怠感すら生じるようになる。「おれたちはみな農民である／ずるぶん忙がしく仕事もつらい／もっと明るく生き生きと／生活する道を見付け」るために、「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」と呼びかけたときにくらべると、大きな相違である。そしてそれは

そのまっくらな大きなものを

おれはどうにも動かせない

結局おれではだめなのかなあ

……………

ああ松を出て社殿をのぼり

絵馬や格子に囲まれた

うすくらがりの板の上に

からだを投げておれは泣きたい

〔そのまっくらな巨きなものを〕

という絶望にもつながら、これが発展して、「雨ニモマケズ」にうたわれたような対人関係——「ミンナニデクノボウトヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ／サウイフモノ／ワタシハ／ナリタイ」という境地にまで達するのである。

しかし、これらの対人関係——彼に対する反感や非難の原因を、先にも少し触れたように、賢治は観念的にしか考えようとしなかった。われわれ学校を出て来たもの／われわれ町に育ったもの／われわれ月給のとったことのあるもの（『作品・第一〇四二番』）とか、「金持とおもはれ／一文もなく一文の収入もない／そしてうらまれる」（『金策』）といい、この「金策」などは、昭和七年六月十九日、母木光氏に宛てた「何分にも私はこの郷里で財ばつと云はれるものの社会的被告のつながりにはいってゐるので、目立ったことがあるといつても反感の方が多く、じつにいやなのです。じつにいやな目にたくさんあつて来てゐるのです。財ばつに属してさっぱり財ばつでない人くらゐたまらないことは今日ありません」という書簡に符合するものである。これら、「社会的被告のつながり」が賢治と農民たちの感情とが融和しない一因をなしていたであろうが、その根本的な原因は彼の行動や考え方にあったのである。まず彼の年譜を繕いてみると、大正十五年十二月に上京している。これは四月以来の念願がやっと叶えられたといわねばなるまい。この四月から農民としてスタートをきり、さらに八月には「羅須地人協会」を設立し、その間僅か八ヶ月足らずであ

る。いくら農閑期であつたとはいへ、「都人よ来つてわれらに交はれ」と呼びかけた彼が上京したのを、農民たちが如何に受けとらうとも、それは農民たちの責任ではない。東京で彼のなしていたことは、さしあたって、彼が全力を注入して増収をはかろうとしたこととは何ら関係のないことである。「毎日、図書館に午後二時ごろまでいて、それから神田へ帰つてタイピスト学校、数寄屋橋側の交響楽協会とまわつておそわり、午後五時に、丸ビルの中の事務所で、工学士の先生からエスペラントをおそわ」つており（『父宛書簡・大15・12・15』）、そして、二百円の送金を父に依頼しているが、当時の二百円とはいふまでもなく大金である。この手紙や、教師時代には月給をそのまま他人にくれてやつたり、またはレコード代にすべて使いはたしたことを考へてみれば、やはり賢治は、「おぼっちゃん」だということである。この「おぼっちゃん」的な考え方は、「作品第一〇八八番ノ一」においても

青ざめてこわばつたたくさんの顔に

一人づつぶつかつて

火のついたやうにはげまして行け

どんな手段を用ひても

弁償すると答へてあるけ

（傍点・萬田）

と農民たちに、すまない気持ちの不安さをふりきつて自らに言い聞かせているのであるが、この「弁償」の語には、何よりも彼の経済的地位に対する潜在意識が出ていることは、恩田逸夫氏も

指摘するところである。もちろん、彼の気の弱さ、誠実さも見逃せないのである。彼自身栽培した菊やダリア等を無料で配って歩いたり、「羅須地人協会」、「無料肥料相談所」の維持などを考慮すると、いろいろな出費があるわけだが、無償でやっていること事態、農民たちの側からすれば、すでに「おぼっちゃん」的存在、ないしは金持ち息子の道楽としか映らなかつたのであろうと推察される。また、「それでは計算いたしませう」のなか

の「肥料はそこで反当いくらかけますか／安全に八分目の収穫を望みますかそれともまたは／三十年に一度のやうな／悪天候の来た時は／藁だけとるといふ覚悟で大やまをかけて見ますか」のよ

うに、「ヤマ師」的などころもあつたことを見落してはならないと思う。農民たちは、稲をりっぱに育てるために肥料を使用するわけであるが、その肥料費を「一冬鉄道工夫に出たり／身の切るやうな利金を借りて／やうやく」拮出するのであり、いわばその肥料に全生命を賭けているといつても過言ではないのである。

このように、彼の行動や考え方は無意識のうちにあるが、うらはらなものがある。それが農民と彼の間に壁をつくり、その活動を挫折しなければならぬ原因であつたにしろ、その農民を思うところを捨てることができない、というより無意識をうちに農民のことを考えていたといつたほうが適切であるかもしれない。何故ならば、彼において、他の何よりも先行することは宗教人だつたということである。そこで次には農民のために尽くしたこともよい例である「羅須地人協会」の活動を中心にして、彼の

行動と考え方を探つてみたいと思う。

4

大正十五年四月に農耕生活にはいり、その八月に「羅須地人協会」を設立したわけであるが、如何なる理由でこの「羅須地人協会」を設立したかは、いまだ明らかにされていない。賢治の作品やその他の資料から臆測を試みるならば、「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」（「農民芸術概論」）る故、農民同志が一つの共同体をなし、目的に向つて——「もっと明るく生き生きした生活を見付け」るために前進しなければならないと考えたのではなからうか。そこでは「農民芸術」の講義、農業に必要な化学や土壌学、園芸学、肥料のこと等の講義をなし、また物々交換、すなわち自給自足経済の構想も試みられたのである。農民が幸福になるには、一つの共同体として活動することであり、そしてより多くの収穫をあげることが、唯一の方法と考えたのである。

ところで、大正十五年（昭和元年）前後の社会状況や中央文壇の動向は如何なるものであつたのか。

第一次世界大戦後の経済恐慌は、重大な社会不安をかもしたことに、独占資本の育成、失業者の増大、農民を窮乏に追いこむといった社会不安は、個人主義的な文芸思潮の行き詰りを生じさせることにもなる。大正十一年には日本農民組合が、同十五年十月には日本農民党が結成され、さらに十二月には、日本労働党が結成されるが、こういう状況下にあつて、以前より抬頭しつ

つあった労働者文学が急速に發展してきたのである。「野良に叫ぶ」の発行もやはり同十五年である。

一方、東北地方は天候に恵まれず、うちつづく凶作に見舞われ、彼の作品にも見られるように稲熱病やその他のあらゆる病害を作物に与えており、六年に一回は平年の収穫の半分以下の大凶作、三、四年に一回は平年の五分の四の収穫しかないと言われている。これがやがて大きな社会問題に發展し、婦女子の人身売買が公然として行なわれ、中小地主はその土地を奪われ、自作農は小作農へ移動することを余儀なくされた。そして農民たちは、これらの事情を少しでもかばうために、多収穫をあげて、その米を売りに出す、といつても苦勞をして収穫をなした米は廉価で手ばなざなければならないし、その反面、生活必需品を割高く買入れるといつた矛盾をくり返したのである。そして、自分の作つた米が自分の口に入らず、廉価な外米を喰べてまで現金収入をはからねばならないのは、より多くのよい肥料を与えるためである。より多く収穫を得ることは、農民たちの生きていく唯一の道であつた。この悲惨な状態は、「グスコフ・ブドリ」の伝記」に詳細に描かれて

賢治が労働生産力を向上させるような努力をしたかどうか、どのような努力をしたかが問題である。しかし、賢治はそういう方向にはなんの努力もしなかつた。たしかに土地生産性の向上は労働生産力の向上に役立たぬわけではない。しかしそれは極めて微弱なものにすぎない。(中略)労働力の向上とは直接には機械の使用を意味するし、(中略)日本農業の機械化をばんでいるのは、日本の狭少な地勢でもなく、水田耕作の特殊性でもない。そうした自然条件ではなくて、それをそうさせている日本資本主義の構造という人間関係であり階級関係である。<sup>註8</sup>といひ、さらに続けて、賢治は「地主的土地所有制度、いいかえれば地主对小作の対立関係を見失うことによつて、すべての機械化の方向を見失つた」のであると言ふ。この中村氏の言うように、「労働生産力の向上」に努力をしないで、「土地生産力の向上」ばかりに力を注いだことは認めざるを得ないが、しかし、「地主的土地所有制度、いいかえれば地主对小作の対立関係を見失」なつていたかどうかは疑問である。といふのは、賢治はロシアに行つて、小作争議の勉強をしてみたいと人にも話し、「なめとこ山の熊」、「オッペルと象」、「カイロ団長」、「ネネムの伝記」等において、あれだけ鋭い資本主義の矛盾に対する批判をみせた彼だからである。また、花巻地方は東北の他の地方よりも封建的な匂いが強い反面、もっとも革新的ないし進歩的なところであり、人よりも敏感な神経の持ち主であつた彼が、また感受性の強い彼が、社会主義運動興隆期に対して無関心であつたとは思へられないの

である。たとえば、「作品第一〇一六番」を読んだ浅野晃氏は、「賢治の詩をだんだん誦みすんでいて、この作品に至ったとき、わたしは一種特別の衝撃を受けた」と言い、続いてその作品の解説を次のように書く。<sup>註</sup>「ここに労農党とあるのは、正しくは労働農民党であって、大正十五年（昭和元年）のはじめ、農民労働党の解散の後を承けて結成された左翼の政党であった。」その労働農民党が、意外にも賢治の詩の文句にあらわれてきたのだから、わたしは衝撃をうけたのは無理はない。」

浅野晃氏が指摘するように、「農民労働党」から「労働農民党」と変わっていったことを見逃がさない程、そういう動きには関心をもっていたのである。そして、彼の蔵書目録を見ても、マルクス、ブハリン、ディーツゲンその他の唯物論哲学者のいくつかの著書があり、当時の盛岡高等農林学校々長の回想にも、彼が「赤化」するかもしれないので注意していたと記されている。

では賢治は資本主義の矛盾に気付きながら、何故その方向に進もうとしなかったのか（この問題については、拙稿「農業技術者としての宮沢賢治」（大阪電気通信学園研究紀要・第一号）にふれたのでここではその要点だけを述べることにする）。

彼は、自己の行動について自ら「春と修羅」第二集（昭2・1）の「序」で、「げだし、わたくしはいかにもけちなものではあります。……おれたちは大いにやらう、約束しようなどということよりは、もう少し下等な仕事で、頭がいっぱいなのでございませうから。」と言うのである。「おれたちは大いにやらう、約束しよ

う」などと大言壮言してはばからぬ人よりも、もっと身近かな、自分に可能な仕事として施肥指導、園芸指導をなし、そして「羅須地人協会」によって倫理革命をしようとしたのである（「作品第一〇五六番」では詳しく述べられている）。

しかし、中村氏の批判——「労働生産力の向上」に努力しなかったこと——をまぬがれるわけにはいかないが、宗教人・賢治となるとまた別なのではなからうか。つまり、中村氏や国分氏は、賢治という人間を農民文学者として捉えようとするために、宗教人であるということを経視しすぎているような気がする。賢治のこういった言動と行動のうらはらは、宗教人としての要素が濃い結果がなせるわざである。彼において他の何よりも先行するのは宗教人であったということである。年譜に見られるように、四歳の時から仏典に親しみ、あらゆる宗教活動を通じてはぐくまれてきた宗教的精神に、学校で修めた農業に関する専門的知識がブラズされ、それが一つとなってこれらの活動をなしてきたと見るのが妥当ではないだろうか。その証拠に、自己確立を明示した「農民芸術概論」に「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」というのも、その裏面にはただ一人の人間の不幸をも絶滅しなければならぬという宗教人としての彼の精神が凄じいほどににじみでているのである。さらに彼の絶筆も「病のゆゑにもくちんいのちなり／みのりに棄てばうれしからまし」というものであるし、その遺言も国訳法華経を印刷して、それを知己へ頒布することであったのである。

ここでは一応賢治を宗教人と規定したわけであるが、かと言って谷川氏の説を支持するわけではない。何故ならば、谷川氏のそれはあまりにも宗教人であることにウエイトをおきすぎている感がある。谷川氏も中村氏もそれぞれ、賢治における多様性の一面だけをとらえて論じようとするところに、あのような両極端な論がでてくるのではあるまいか。これら二氏のとらえ方、また、彼という人間を形成している他の多くの面を総合的に考えることによって、人間賢治が浮き彫りにされるであろう。

註1 「宮沢賢治論」(お茶の水書房「国民の文学・近代篇」所収)「宮沢賢治」(福村書店)

註2 「アヴァン・ギャルドの文学」(勁草書房「昭和文学の成立」所収)

註3 拙稿「宮沢賢治論——そのロマンティズムについての試論——」(大阪電気通信大学研究論集 第一号所収)

註4 「石鳥谷肥料相談所の思い出」(筑摩書房版「宮沢賢治研究」所収)

註5 この作品の成立年代は昭和六年説に従った。拙稿「宮沢賢治小論——孤独感を中心に——」(論究日本文学 23号所収)

註6 「宮沢賢治物語」(岩手日報社)

註7 「宮沢賢治の農耕文学」(跡見学園国語科紀要 4号所収)

註8 「定本・宮沢賢治」(七曜社)

註9 「宮沢賢治と私」(元々社版「現代の詩」所収)